

秋冬ブロッコリーの病害対策
〜令和4年度の調査から〜

① 育苗時の黒すす病

令和4年度の秋冬ブロッコリーでは、苗に黒すす病が発生しました(写真1)。発病した苗をそのまま本ばへ定植すると、ほ場内に病気が広がる可能性がありますので育苗時に1回は防除します。



写真1 苗での黒すす病 (令和4年8月15日)

② 本ばでの黒すす病の広がり方

定植10日目に下葉に黒すす病の病斑が見られたほ場で、その後下葉から上位葉の葉裏へと病気が広がる様子を確認しました(写真2)。このとき、葉表には明瞭な病斑が認められませんでした。

本調査から、定植直後から黒すす病の感染リスクがあること、また、気付かない間に葉裏から病気が

が拡大する可能性があることがわかりました。葉表が正常であるように見えても、病気が広がっている場合もあるので、油断せずに定期的な防除を行ってください。

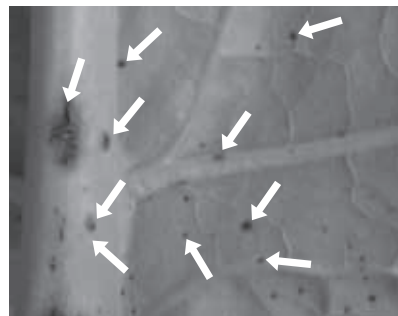


写真2 上位葉(葉裏)での発病 (令和4年9月14日:定植後38日)

③ 根こぶ病対策の実証

根こぶ病は、根に「こぶ」ができる病気で(写真3)、土壌中の菌密度が高いと発病リスクが高まります。

土の中の菌密度を減少させる方法の一つに「おとり作物」と「オラクル粉剤」を組み合わせる手法があります。「おとり作物」は、根こぶ病菌(休眠胞子)の発芽を促すことで自身は根こぶ病に感染しませんが、発病はしないので土壌中の菌密度を減少させることができます。また、「オラクル粉剤」は休眠胞子の発芽を阻害しないので



写真3 根こぶ病を発病し下葉が萎れる株

「おとり作物」への感染を邪魔せずに、休眠胞子から放出される遊走子のみを殺菌して、土壌中の菌密度を減少させることができます。令和4年度は、この「おとり作物」として「おとり大根CR-1」を使用し、「オラクル粉剤」と組み合わせた根こぶ病対策を実証しました。

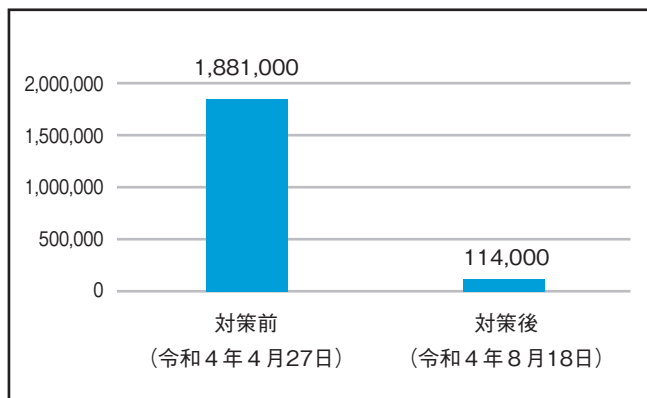
結果は、対策ほ場における土壌中の菌密度が減少し(表1)、「こぶ」の着生程度が大きく改善しました。また、A品率も向上しました(対策前:60%から対策後:95%)。さらに、費用の観点からも導入効果が高いと評価できました(表2)。

「オラクル粉剤」のみの処理でも土壌中の菌密度を減少させる効果が認められていますので、根こ

表2 技術導入にかかる費用等

対策ほ場における根こぶ病対策導入費用	35,243円/10a
対策ほ場における対策導入前後の手取り額の差(試算)	対策後 +177,100円/10a
※おとり作物:「おとり大根CR-1(朝日アグリア株式会社) 12ℓ/10a ※オラクル粉剤(日産化学株式会社) 30kg/10a ※オラクル顆粒水和剤(日産化学株式会社) 95g/10a (500ml/144穴育苗トレイ 使用倍率200倍) ※栽植密度:5,500本/10a、ブロッコリー単価:115円/株、手取り:反収の80%で試算	

表1 土壌中の休眠胞子密度(個/1g土壌)



ぶ病の発生が見られるほ場では導入を検討してみてください。